

庫)に引用されている (Lecture Books 版, p.110; 河出文庫版, p.100).

図 8.3 と 8.4 はそれぞれ『不思議の国のアリス』からつくった二次と三次の単語列である。どちらも「不思議な『不思議の国のアリス』」だが、8.4 のほうがより「不思議さの少ない『不思議の国のアリス』」になっている。

p. 185

- 2080 宮部みゆき『スナーク狩り』(光文社, 1992年, Kappa Novels Hard)

「おれはスナークと闘うんだ——毎日、日が暮れて夜になると——  
半狂乱の夢のなかで  
暗闇のなかでそいつに野菜を与え  
火を起こすのに使うんだ

だが、もしもその日、ブージャムに会ってしまったら  
あっというまに (これは確かだ)  
おれはおとなしく、しかも不意に消え去って——  
こんな思いには耐えられない！」

——ルイス・キャロル  
『スナーク狩り』 八章からなる死闘

p. 4

- 2081 武良竜彦『三日月銀次郎が行く』(新潮社, 1990年, 新潮文庫)

不思議なことに、山猫の体がすっかり消えてしまった後も、そのニヤニヤ笑いだけがいつまでも樹の枝の上に残っていました。

p. 141

- 2082 矢川澄子『わたしの気まぐれ A to Z』(大和書房, 1994年)

年表を見ているうちに、面白い暗合に気がついた。  
有名なあのルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』の初稿手書き本は、『アリスの地下冒険』(アリスズ・アドヴェンチャー・アンダー・グラウンド)と銘打たれている。もっともここではアンダーは前置詞として、グラウンドと区切られてはいるけれど、そのアン・グラ篇アリスのまとめられたのが、きっかりおなじ一八六三年のことなのである。なるほど新し物好きのルイス・キャロルのこと、無意識のうちに地下鉄掘削のニュースをお話にとりいれていたかもしれないではないか。

p. 100

- 2083 柳瀬尚紀「アリアス・マリス『アリスなんて怖くない』抄訳」(柳瀬尚紀『ノンセンソロギカ』(朝日出版社, 1978年, エピステーメー叢書) p.129-141)

参考までに、ルイス・キャロル『シルヴィーとブルーノ』第九章に、つぎのせりふがある——“It's part of the Conspiracy, Love! One must have an alias, you know ——”

p. 129